

南和歌山医療センター 緩和ケア病棟「陽だまり」

人生の終末期、安らぎと憩い、充足のときに



海側に向かって建つユニークな緩和ケア病棟

当院の緩和医療は、緩和ケア病棟、緩和ケアチーム、緩和ケア外来、在宅緩和医療から成り立っています。当院緩和ケアチームでは、患者さんが治療を受け始める早期より疼痛や



木下 統括診療部長

近頃の医師と密に連絡を取りながら在宅緩和ケアチームによる在宅医療を行い、入院加療を希望されれば、緩和ケア病棟に入院して頂

笑顔もあふれる緩和ケア病棟
提供しています

南和歌山医療センター 統括診療部長 木下 貴裕

精神面の管理に、養育士、理学療法士など全ての職種によるチーム医療を行っています。

緩和ケア病棟は、2005年、地域ニーズに



全職員19名、本日の当番はこの人たち

平野医師は、和医大卒。札幌医科大学研究

がん患者の痛みを解消
安心の医療用麻薬

南和歌山医療センター 麻酔科医長 平野 勇生

がん患者にとって、最も辛い苦しい事の一つが、痛みとの闘い。が、急速な医療の進歩は、そこから患者を解放し、生活の質を向上させ、結果、がんにも敢然と立ち向かい、延命にさえ役立つ力を与える事すらある。

緩和ケア病棟、がん患者の大きな拠り所、それが麻酔科の権威麻酔科の平野勇生医長だ。包み込むような穏やかな笑顔が、患者や家族に絶対的信頼と安心を与え続けている。

共に悩み、共に考え行動する

できれば穏やかにその生涯を終えたい。笑顔で家族や友人たちに別れを告げたい。そんな切なる願いに応えてくれるのが南和歌山医療センター（中井國雄院長）の緩和ケア病棟「陽だまり」だ。

やがてくる人生の終末期。それがながし



広々とした談話室



患者に寄り添うスタッフ



平野 勇生

尊厳を守り 生活の質を向上

痛みは、がん患者最大の苦痛であり、恐怖の源。さりとて、強痛止め薬の使用は、副作用による効果の減少や、体力の消耗による命の圧縮、あるいは、

入院の対象となる方

悪性腫瘍や後天性免疫不全症候群の患者で、症状緩和に対して積極的ケアを必要としている方（症状が落ち着くまで入院して頂く）

入院の手続き

現在の掛かりつけ医による緩和ケア入室申込み書と紹介状が必要（同院ホームページよりダウンロードできる）

ある男性は、すい臓がん末期の伴侶を「最後は自宅」と思っていた。痛みを訴えても麻薬使用を拒否する人

悲しみを乗り越え頑張る奥田恵子さん



奥田恵子さんは、2年前の7月、ついに同センター入院。急な入院のため、緩和ケア病棟に空きはない。しかし、その分、医療スタッフは、正に寝食を忘れて懸命に対応。そんな小さな事に対して、真剣に向き合ってくれた。そして「今

私たちは、南和歌山医療センター緩和ケア病棟の誠心誠意、慈愛の心あふれる看護で、本当に救われました。本院にお世話になったのは、上富田町に移住して数か月だったので、父はもともと、腹腔鏡手術は成功するも、既に肝臓に転移。深刻な状況。

私たちは、患者さんやご家族がその人らしく人生を送って頂けるよう、日々お手伝いさせて頂いております。私たちが出来る限り、心に残るような苦痛を乗り越え、人生の先輩から学びたいと思っております。

私たちは、緩和ケア病棟の医師、看護師さんに救われました

家族が母が母の感謝

患者さん・ご家族の心に寄り添って

がん性疼痛看護認定看護師 井上 明美



井上 明美